

書評

『仕事おこしのすすめ』

池上 惇著 シーアンドシー出版・協同総研
定価1300円 132頁

加藤 憲仁（東久留米自治研究会）



料や資源を浪費し、自然を破壊して営利をむさぼり、あげくの果ては、国を棄てて、雇用なき景気回復へと向かおうとしている。自治体までもがリストラされようとしており、大資本の前に労働者・市民が犠牲にされようとしている。

こうしたなかで、これまでの産業・経済のあり方や労働のあり方が問われ、地域のあり方が問われている。環境を保全し、安全な食料を自給し、高齢者や障害者の福祉を充実させる——営利追求の影で置き去りにされてきた、いのちと暮らしを守る、社会に有用な多くの仕事が求められているが、今や、労働者・市民自身が、それらを担う力を創っていることが求められている。まちづくりが注目され、地域からの仕事おこしに熱い関心が注がれている。市民や市民運動からは、NPOやNGO、市民事業や非営利組織に関心が寄せられ、自治体の側からも、それらがまちづくりに果たす役割に期待されだしている。昨年の秋私は、三多摩の草の根交流集会で「企業社会ともう一つの働き方」の討論を企画したが、単身赴任や過労死、人権無視など企業内での競争的労働に対抗して「労働の人間化」をめざして闘う労働者から、ワーカーズ・コレクティブなど地域での新しい協同労働に新鮮な目が向けられた。

この『仕事おこしのすすめ』は、そんななかで刊行された、まさに、待望の書である。池上先生は、まちづくりや仕事おこし、障害者運動や保育運動などに先駆的に注目され、また、そこでの協同の思想と運動に着目されるなど、人間の主体的

複合的で構造的な不況といわれるなか、世の中は、リストラばかりである。大企業は、地球環境の悪化を省みることもなく、化石燃

活動との関わりで経済学を展開され、発達論や情報理論を取り入れながら、「人間発達の経済学」へと体系化されてきた。この本では、労働者協同組合・非営利組織の理念・労働・組織を学びながら、「仕事おこし」から社会変革が展望される。序章と運動の経緯や可能性を紹介した第1章。第2章「現代の協同労働の可能性」第3章の「労働者協同組合と人間発達」と「おわりに」からなり、労働の人間化としての協同労働の本質を「人間の発達を保障する労働」であるとしながら、非営利団体の組織運営について考察され、「雇われ者根性の克服」による仕事おこしで、「労働者と市民の目から見た地域づくり」が呼びかけられる。欄外に加えられた〈協同のことば〉も、実践的な重みと含蓄のあるものとして参考になる。

この本は、労働者協同組合をモデルとしているが、非営利組織の性格や日本での歴史、理論を学べる新しい指導書であり、労働組合や市民運動など民主的運動全般に共通する組織と運営の書としても活用できる。協同労働や社会変革への考察からは、労働のあり方の未来や企業社会の変革をも展望できるが、労働運動や市民運動の新たな発展を考えるうえからも活用が期待される。親しみやすく述べられ、読みやすい文体でありながら、現代的な課題に答える極めて示唆に富んだ凝縮された内容が含まれており、様々な分野の運動者に必読の書と言える。